

不全感の残っている 在宅での看取りの支援を振り返る

●事例提出者

Aさん（居宅介護支援事業所・
看護師）

A

●クライアント

利用者：Zさん・84歳・女性

Z

◆提出理由

このケースは適切なときにいちばん大切な部分の
アセスメントを行うことができていなかったた
めに、急激で大きな変化に体制を整える時間もな
く、急ぎ足となり十分な看取りへの支援ができな
かったように感じている。日々、多くの方々のエン
ドステージを担う重要な役割である一人の担当
ケアマネとして、また事業所の主任介護支援専門
員、管理者として、このケースを振り返りなが
ら、最期までその人らしく生きていくことを支え
るためにあらかじめ準備をしておかなければなら
なかったことを見つめ直していきたい。

◆事例の概要

●現病歴：甲状腺機能低下症・両変形性膝関節
症・不眠症・老年性うつ病・胃がん末期（定期的
に健診を受けていた地元のクリニックで腹部超音
波検査時に異常が見つかり、総合病院へ検査入院。
がん末期と診断される。本人には胃潰瘍と説明）

●家族状況：4人きょうだいの3番目として生ま
れる。2人の兄は胃がんにて他界。妹（78歳）
は隣県在住。夫は約40年前に胃がんにて他界。
子どもは息子が3人、娘が1人。長男は10年前
に胃がんで、次男は4年前に交通事故で他界。三
男は隣県に在住（車で約1時間の距離）。娘は夫
の仕事の関係で海外に長期居住中。

●生活歴：18歳で就職のため来県。事務員とし
て入った会社で夫と知り合う。23歳で結婚。結
婚後もフルタイムで働く一方、地元の商店街の世
話役としても積極的に活動するなど、地域では有
名な厳しくも頼りになる存在であった。44歳の
とき、夫を胃がんで亡くす。友人は多かったが、
最近親友が相次いで他界、馴染みの顔ぶれも少な
くなったと寂しそうに話されることが増えていた。

●事例提出者のかかわり：平成13年から当事業
所と居宅介護支援の契約を結ぶ。直接的に担当ケ
アマネジャーとなったことはなく、管理者・主任
ケアマネジャーとしてかかわりをもってきた。自
身の訪問は2～3カ月に1回のペース。その他、
生活に不安や変化が生じたときに連絡を受け、随
時の訪問を続けていた。

◆支援経過

H20年8月28日

かかりつけのクリニックの主治医・J医師から
電話をいただく。Zさんは胃がんの可能性が高

い、これまで最期に向けての希望や家族のことに
ついて聞き取れていなかった、どこに連絡をすれ
ばよいだろうかと問い合わせ。電話番号だけを聞
いていた三男に初めて連絡を入れる。

その日の夜、三男はクリニックへ。J 医師から
の報告を静かに聞き、目を伏せて一言、「私は母
から嫌われてきました。次男の葬儀を除いては、
少なくともここ10年は年に1回も会ってもらっ
ていません。どうしたらいいのか……。しばらく
考えさせてください」と言い、深く一礼。そして
クリニックの外から、「なんで今までわからなか
ったんだ、このやぶ医者！」と怒鳴り声、数回看
板を蹴る大きな音がする……。

8月29日

就業時間が過ぎ、皆が帰り支度をしはじめたと
きに不意に三男が事業所を訪ねてくる。

三男：母に会って来ました。担当のケアマネさん
ってどなたですか？ 母がとても褒めていまし
た。優しくて話し好きなどとてもよいケアマネさん
だと。(担当のFケアマネが笑顔で歩み寄る)

A：Fさんです。今日は今帰るところだったので
すが、ご紹介しますね。

F：はじめまして。私が担当をさせていただいて
いるFです。お会いできてうれしいです。

三男：そうですか。ありがとう。では、母はどう
いう最期を望んでいますか？

F：……。最期って？ 何かあったのですか？
私、聞いてない、なんで今そんな最期って。Zさ
ん、お元気にされていますよ、だって先週も私
……。 (涙ぐみ、動揺している)

A：彼女にはまだ伝えていないのです。そんな急
に……。お願いします、落ち着いてください。少し
でいいので彼女の気持ちも考えてください。

三男：そうですね、すみません。でも、このくら
いで動揺するようでは、母は任せられないんだ
よ！ これから母は、何も知らずに大きな病氣と
闘っていくのだから。時間がないんだ！ あんた

はいつまでも人は元気でいられると思っているの
か？ 明日死なない自信があるっていうのか!!

A：わかりました。私がとことんおつき合いま
す。だから、彼女を今日のところは帰してやって
ください。三男さんにもそうであったように、彼
女にもあまりにも急すぎます。

三男：君たちは専門職だろ？ なぜわからなかっ
た？ なぜ今まで連絡をくれなかった？ 言っ
てみる！ Fさん、あんたは優しいがいつも世間話
をしに来ていたそうじゃないか。それがケアマネ
の仕事か！ ただ月に1回行っていればいいわけ
じゃないだろう。先週は何を話したんだ、言っ
てみる！

A：申し訳ございません。ご連絡の件はZさんの
希望だったのです。でも、するべきではなかった
のかと、私は今思っています。それからFさんは
世間話をしに行っているわけではないのですよ。
何気ない会話のなかからお母様の変化を察知し、
ご訪問時には部屋の様子や空気、さまざまなこ
とを観察しながら今を、これからを考えているの
です。私はその報告を受けていました。ですから不
足があるのなら、私の責任だと思います。

三男：かばいあい。ふん、美しいな。こっちは
時間がないんだよ！ (机を叩く)

A：三男さんのお気持ちはほんの少しかもしれま
せんが、私にもわかります。J先生からお電話を
受けたときの私の気持ちもそうでした。でも、私
にも三男さんにもあれから1日ありましたよね？
Fさんにはないのです。先生からのお話も何も。
だから、今日は私たちでこれからのことを、とこ
とん話し合いませんか？ 時間がないのですか
ら。私、何時まででもかまいません。

三男：ふざけるな、家族でもないくせに何がわか
る。俺自身がわからなくなっているのに……。 (涙)。

A：当たり前です。家族なのですから。たったひ
とりのお母様のことじゃないですか。そのくらい
でなきゃ、私たちもあなたを信頼できません。だ

って、そうでしょうか？ 長男さんが亡くなられてからずっと10年、ご事情があるにしても辛かった今までのおひとりの生活を、ヘルパーさんやここにいるFさんや商店街の方々が今までずっと守ってきたのですから。家族にはなれないけれど、皆、ご家族の気持ちは痛いくらいにわかる人たちなのです。大切なお母様の今後。時間がないのでしょうか？ さあ、一緒に考えましょうよ。

三男：しかたない、時間がないから始めるとするか……。必要のない奴は帰ってくれ、目障りだ！

それから3時間。怒りの中で、でも切々と語られる三男の思いと現在までの経過を聴いた。それしかできず、でも、それが今、私にできる一番大切なことであると感じていた。

●三男の出した結論

①告知は最期まで絶対にしない、②勤のよい母親に気づかれる要因はすべて全力で排除していきたい、③自宅で自分の立会いのもとに看取りたい。

8月30日

翌日、Fケアマネに昨日の様子を伝える。Fさんは、最後までかわかりたいが、自分には隠し通す自信がないと不安いっぱい話す。三男が怖い、きつと言いたいことが伝えられない、私には荷が重過ぎる。⇒事業所の判断として、Fさんから主任ケアマネ（事例提出者）へ担当を変更。

9月2日

J医師を交えてZさんへ検査入院の説明。目的は①Zさんには重度の胃潰瘍と説明する、②検査が必要だということで総合病院をご案内する、③そのために三男の協力を仰ぐことについて了解を得る、の3点。私は何かが変わると信じたくて、診察室での会話が聞こえる隣の検査室に三男を呼ぶことを提案し、来てもらった。

J医師：悪いものじゃないのよ。でも、このまま悪化するとZさんのご主人のときと同じ。がんになる場合もあるのでちゃんと検査をするために、入院をしましょう。

Zさん：わかりました。悪いものでなくてよかつ

たです。でも、悪いものになる可能性があるから、すぐ入院して検査をするのですね。その際に手続きがあるから三男を呼ぶ必要がある。

A：入院や検査のときにはご家族の同意や保証が必要になりますからね、ごめんなさい、Zさんは三男さんには誰よりも心配をかけたくなかったのに。でも、ご家族でないとダメなこともあるの。三男さん、どんな方なのかな？ きつと優しい方なのでしょうね。

Zさん：そう。あの子はね、昔から甘えん坊で。他のふたりとは違って最後まで私の元を離れずに私を守ってくれようとした——。一番可愛いあの子の世話になるなんて、この歳になって初めて。馬鹿だよ私は、情けない……。

A：やはりそうだったのですね。Zさん、情けないなんて言わないでください。せつかくだからこの病気をきっかけに、今まで離れてしまった時間を埋めていきましょうよ。三男さんもそれを喜んでくれるのではないのでしょうか？ 私が三男さんだったら、きっと自分はお母さんに嫌われているんだと誤解してしまっているのではないかと思いますよ。それこそ大変なこと。

Zさん：そう思う？ 誤解しているかしら？ あの子、私のために来てくれるかしら？

A：Zさんの息子さんじゃないですか。わかりますよ。きつと何も言わなくても。Zさん、不安なこと、今日は全部話してみてくださいませんか？

Zさん：三男はね、長男の亡くなった年からのこの10年間で、やっと巡ってきたチャンスをものにできるかどうかの大切な時期だったの。だから私のことなんか気にせず仕事を頑張ってたのよ。電話で私が何か言うとすぐに心配して飛んで来てしまう。家と仕事場の往復だけでも2時間かかるのに、私のところに寄っていたらあの子の身体がもたない。そう思って、会いたかったけれどずっと我慢してここでひとりで生活してきたの。あんな離れた場所に住んだのも、私が悪い。息子を取られるようでお嫁さんをいじめたか

らね。当然のバチが当たったと思っているよ。

＊

「僕に母のこれからの時間を一緒に歩ませてください。お願いだから母に告知だけはしないで。そしてそれがバレないように支援をしてほしい。あとは僕には嘘をつかないでもらいたい。母には僕が嘘をつき通しますから」。そう言って三男さんはクリニックを後にされた。

● その後の経過

入院、退院を繰り返しながら病状は少しずつ悪化。J医師、師長、ヘルパーをはじめとするあたたかいスタッフに囲まれ、Zさんと三男は少しずつ落ち着きを取り戻し、笑顔が増えていった。私たちはご自宅での母子の時間を大切にしながら、充実した支援を行っていたように思っていた。

10月10日

今日から数日が山、というある日のこと。

Zさん：Aさん、いろいろありがとうございます。あなた辛かったでしょう？ 私はもう大丈夫。こんなに幸せな時間が過ごせるなんて。ずっと、思ってもみなかった。私、全部知っているのよ。でも、知らないふりをするのが、私が最後にできるあの子や皆さんへの恩返しだと思っていたの。こんなことなら私、早く相談をしておけばよかったわ。あの10年はいったい何だったのかしらね。

その日の午後、三男はじめ、皆が寄り添うなか、Zさんはご自宅で永眠された。

そして深夜、三男から1通のメールが届く。

10月11日

A様 そして皆様へ

気配りは、医療・福祉では非常に重要な項目で

すね。私もこの歳になって初めて「人と人とのコミュニケーション」を学びました。組織のリーダーでありながら、私自身の欠如も一から学習したように思います。思いやりが人間の基本なのですね。母より「心から感謝しています」、息子からは「心からのありがとう」の気持ちを送ります。

ただ、ケアマネジャーの仕事とはなんと難しいものでしょう。Fさんには悪いことをしたと思っていますが、あれはたぶん、大切な家族を託す、家族の飾らない本当の気持ちだと思います。Fさんがそうであると言っているではありません。あのときの私の怒りの標的になってしまっただけ。そこは十分理解をしていますし、私はFさんを認めています。何の仕事だって初めから全部を引き受けることはできないのです。だからそこには成長がなくてはなりません。特に医療や福祉は相手が人であることが難しい……。

家族には話せないこと、家族だからできないこと、家族にしかできないこと、他人だからこそできること。出会うひとたちによって、人の人生はこんなにも変わるものなのかと実感致しました。

本当に皆さんのご尽力に感謝致します。最期に母と過ごせたあたたかい時間をありがとう。

追伸：ただ、あの10年を少しでも母とともに歩むことができていたなら……と考えると、そこには納得がいきません。そうは思いませんか？ でも、それは私自身への反省なのかもしれません。私にはこれが最後の反省になるでしょう。でも皆さまが、これから同じ思いを繰り返すことがありませんように。これからのさらなるご活躍を期待します。

ケース検討会

検討課題の設定

高橋 ありがとうございます。まずはじめに今日の検討課題を設定したいと思います。事例の説

明が終わったところで改めてお聞きますが、このケースでAさんが一番ひっかかっているのはどんなところですか？

Aさん ひっかかっているのは一つではない気が

しますが、一番大きいのは十分な看取りができなかったという不全感です。

高橋 「十分な看取りができない」というのはどういうことですか？

Aさん 私がいつもターミナルのケースにかかわるときに心がけているのは、告知の問題も含めて利用者さん本人にどういう最期を迎えたいのかをしっかりと聴き、その思いに添えるように支援をしていくことです。その点からすると、このケースではZさん自身がどういう最期を迎えたかったのかを聴けなかったという思いが残っています。Zさん本人ではなく、三男さんの思いに添ってしまったという点がひっかかっています。

高橋 なるほど。会場のみなさんはAさんの提出理由について尋ねたい点がありますか？

発言 「ひっかかっているのは一つではない気がする」ということでしたが、いまおっしゃった点のほかに、管理者としてこの事例への対応は妥当だったのかというひっかかりがあるのではないかと感じたのですが、いかがでしょう。

Aさん そうですね、おっしゃるとおりです。担当変更をするときに、Fさんは「最後までかわりたい」と言ったのですが、三男に対して彼女が怖さを感じていたのと、告知せずにかかわり続ける自信がないと言っていたので、私は彼女を守りたいと思って自分が表に出ることにしました。しかし、はたしてそれで本当によかったのだろうか、という点がひっかかっています。

高橋 もう一つの提出理由が出てきましたね。三男は「告知しないで、嘘をつき通して支援をしてほしい」と要望してきた。そのことについてFさんは「自信がない」と言っていたし、管理者の目でみると彼女がそのやり方を貫くのは難しいと思えた。それで自分が主担当者になった。しかし、Fさんのなかには「最後までかわりたい」という気持ちもあった。上司として下したこの判断は、本当にFさんのためになったのだろうかという点にひっかかりがあるわけですね。

Aさん そのとおりです。

高橋 では、今日の検討課題をその2点に設定してよろしいですか？

Aさん はい、よろしくお願いします。

三男の人物像とZさんとの関係性

高橋 では、これから検討を進めていきしたいと思います。まずはじめに、三男の人物像や三男とZさんとの関係性についてみていきましょう。そのうえで、三男の思いに添って支援をしたのははたして適切だったのかどうかを検証する、という流れでいききたいと思います。それではご質問をお願いします。

発言 お父さんが亡くなられたとき、三男は何歳だったのでしょうか。

Aさん Zさんが44歳の頃でしたので、三男は高校生ぐらいだったのではないかと思います。

発言 お父さんの看取りのとき、お子さんたちはどのようにZさんを支えておられたのか、ご存じでしたら教えてください。

Aさん 看取りのときに限らず、年長ということもあるのですが、Zさんは長男に対する信頼がとても厚く、いろいろな面で支えになってくれていたようです。その後、私たちがZさんにかわり始めた頃に長男は胃がんでお亡くなりになりました。その後はZさんは次男を頼りにしていました。正直、三男のお話はあまりお聞きしたことがなく、時々話題に出ると「あの子の世話にだけはなりたくない」とか「あの子は頼りにならないから」といったことを話されていました。

発言 ご主人が亡くなったあと、三男とZさんはどんな関係だったのか、もしおわかりでしたら教えてください。

Aさん ご主人が亡くなったあと、長男と次男は大学を卒業すると同時に家を出て独立されたのですが、三男は結婚するまで実家から仕事に通っていたそうです。何歳で結婚されたかはわからない

のですが、少なくとも10年くらいは二人だけで生活していた期間があったと思います。

発言 Zさんはご家族のなかではどのような存在だったのでしょうか。

Aさん Zさんご夫婦は職場恋愛で結婚されて、Zさんはその後もフルタイムで働いていました。職場でも家でも夫を支えていた方です。お子さんは男の子が3人もいますので、たくましいところのある「頼りがいのあるお母さん」だったのではないかと思います。

三男の怒りをどうとらえるか

発言 三男はクリニックで医師から告知を受けた後、外へ出てから大声で叫んで看板を蹴ったりしていますが、Aさんはそんな三男をどんなふうにとらえましたか？

Aさん 実は、三男にクリニックに来てもらうよう、J先生に言われて電話で連絡をしたのですが、そのときには直接怒鳴られました。

高橋 どういうやりとりをして、どのような言葉で怒鳴られたのですか？

Aさん はじめに私が自分の名前と立場を説明し、「実はお伝えしたいことがあるのですが、電話ではお話がしにくいので、突然で申し訳ありませんがおいでいただけないでしょうか」とお願いをしました。そうしたら、「わかりました。調整します」と応じてくださったのですが、そのうち急に「なんで今まで電話をしてくれなかったんだ！」と怒鳴られました。その後も冷静に話していたかと思うと急に激昂されることがあり、冷静さと怒りの間を行ったり来たりしているような状態でした。その電話で不思議だったのは、三男はZさんと10年間連絡をとっていないはずなのに、私の名前も役割もご存じだったのです。私から電話がかかってきたということは、きっと危機的な状況に違いないと察知されたようでした。

発言 J医師に一礼した後、外に出て看板を蹴つ

たり、Aさんの電話に冷静に応えたかと思うと急に怒鳴り出したり、事業所に来たときも威圧的な態度に出たかと思うと「自分でもどうすればいいかわからない」と言われたり、三男はかなり感情の揺れを見せておられます。そういう状態をAさんはどのようにとらえましたか？

Aさん 10年間Zさんとかかわりがなかったなかで、連絡があったと思ったら突然エンドステージだと告げられた。三男としては「何もしてあげられなかった」という罪悪感のような気持ちを強く感じたのではないかと思います。それと、自分がおかれている状況をどうとらえればよいのかを受容できていない、葛藤が始まったばかりで混乱されていたのだと思います。

高橋 今考えるとそう整理できるのかもしれませんが、三男が事業所にやって来て「このくらいで動揺するようでは、母は任せられないんだよ！」とか「世間話をするのがケアマネの仕事か！」といったことを言われたときに、Aさんは「この10年間、Zさんをみてきたのは町の人や私たち専門職なんだ。あんたは何をしたというんだ！」みたいな勢いで反撃していますよね（笑）。このあたりはいま振り返ってみて、どうですか？

Aさん 改めて読み返してみると、三男さんは「俺自身がわからなくなっているのに……」と涙を見せているにもかかわらず、こんな言葉を浴びせて、何をやっているんでしょう、私（苦笑）。

高橋 でも、先ほどおっしゃったように、三男はお母さんに対する情緒的な結びつきを感じていて、10年間かかわりをもってこなかったことへの罪悪感などが反動的にケアマネに対する怒りとなって現れたと今はとらえているのですよね。

Aさん はい、そうです。そうか、本当は三男さんが事業所にいらした時点でその葛藤に気づかなければいけなかったんですね。

高橋 大事な点に気づきましたね。

発言 Aさんが三男に電話をしたとき、三男はAさんの名前や役割を理解していたということです

が、その情報はどこから入ったのでしょうか。Zさんの妹さんからでしょうか？

Aさん 妹さん……。たしかにその線もありえますね。私ははっきり、私たちが知らないところでZさん本人から三男に情報がいていたのだとばかり思っていました。情報の経路は未確認です。

高橋 とてもいい質問ですね。三男がどこからZさんの情報を得ていたのかが明らかになると、この家族のコミュニケーションのあり方が見えてきますよね。こういうところを押さえるのも、特に家族にかかわっていくケースでは大事なポイントになります。

看取りの支援の妥当性について

発言 Aさんのひっかかりのひとつは、三男の「告知しない」方針に添ってしまったのは妥当だったのかというものだったと思いますが、そもそも、なぜ告知をしないことになったのでしょうか。

Aさん それはこのご家族の歴史に関係しています。Zさんは胃がんで亡くなったご主人を看取っていますので、この病気がどんなプロセスをたどるのかをすべて知っていらっしゃいます。また、ご自身の2人のお兄さんや長男も胃がんで亡くされています。このご家族の中では胃がんは死と直結している病気なのです。そのうえZさんの場合、胃がんの診断がくだったとき、すでに余命2カ月未満という状況でした。ですから、三男が「告知はしない」とおっしゃったのも無理はないかなと思いました。それに、Zさんは気の弱いところもあって、以前内視鏡の検査を受けたときも1週間くらい眠れなくなったり、食事がとれなくなったことがあります。そういったエピソードを知っていましたので、告知しないことも選択肢の一つかもしれないと思ったのです。

高橋 Zさんの家族の歴史やZさんの性格を考えると、告知しないのもやむを得ないという思いがある一方、それでもAさん自身はZさんの看取り

に関して不全感を抱えているんですよね。

Aさん はい……。やはりきちんとZさんと向き合って踏み込み切れなかった、自分らしい支援ができなかったと感じているからだと思います。でも、Zさんはすべてを知っていたんですよね……。そのことをどう考えればいいのか、その点も悩ましいところです。

高橋 Aさんは三男の「告知しない」という方針に則って看取りの支援をしたけれども、自分としては不全感が残っている。そして、Zさんがすべてを知っていたことをどうとらえればいいのか悩んでいます。ここまでのやりとりをもとに、このケースでAさんがおかれていた状況やAさんが行った支援について、皆さんはどう考えますか？ スーパービジョンのプロセスでは「事例の概念化」といいますが、Aさんのものの見方以外の考え方を提示してあげてください。

発言 亡くなる日の面接でZさんが「すべてを知っていた」とおっしゃる場面ですが、Aさんに対して感謝の言葉を述べたあと、「私はもう大丈夫。こんなに幸せな時間を過ごせるなんて思ってもみなかった。知らないふりをすることが、私が最後にできる三男や皆さんへの恩返しだと思っていたの」とおっしゃっています。私はこの言葉を読んで、結果的にはZさんの思いに添った支援ができていたということだととらえました。

高橋 いかがですか、Aさん。

Aさん う～ん、たしかにそうなのかもしれません。でも、私がちゃんと向き合っていれば、Zさんに「知らないふり」をさせる必要はなかったのではないかと思うのです……。

高橋 ほかの方はどう考えますか？

発言 Zさんの生活歴をみると、商店街で長く世話役をしていたり、地域でも有名な頼りになる存在で、おそらくは家の中でも男性陣を支える役割を担っていたのだと思います。AさんはZさんの神経質な側面をしっかりとアセスメントしておられますが、Zさん自身は人生の歩みのなかで周囲に

対してあまり弱さを見せてこなかった方なのではないでしょうか。もし、自分が弱い面をさらけだしてしまうと、まわりの人がどれだけ不安になるかを十分承知されていたと思うのです。そう考えると、周囲がもっているZさんのイメージを保ったまま、しかもまわりの方に対してZさんが恩返しできる機会をつくることができたのは、「Zさんらしさ」を支える支援としてとてもよかったのではないかと思います。

発言 いまのお話とも関連するかもしれませんが、Zさんはご主人や2人のお兄さん、ご自分の息子さんを胃がんで亡くされています。胃がんがどんな経過をたどるかを知り抜いている方だと思います。今回、Zさんはすべてをご存じだったということですが、そうであればなおさら、胃がんの予後をよく知っている自分に対して告知をしないのは、周りの方々の「やさしさの表現」と受けとっていらっしゃったのではないのでしょうか。三男の看取りに込めた想いは、しっかりとZさんに伝わっていたのではないかと思います。

発言 私は在宅で看取るケースを担当することが多いのですが、いつも思うのは、自宅での最期というのは本当にいろいろなかたちがあって、私たち援助者はどれが最良とは決められないということです。どういうかたちであれ、当事者たちが「いい看取りができた」と思えることがもっとも大切で、援助者が目指すべき支援もそこに尽きると思うのです。その意味で、このケースはZさんご自身もご家族も満足しておられますので、とてもいい看取りの支援だったと思います。

高橋 いろいろな見方をいただきました。いかがですか、Aさん。

Aさん みなさんのお話をうかがっていて、「Zさんらしさ」について改めて気づくことができました。また、「やさしさの表現」という言葉がとても心に響きました。同時に、私の悪い癖はできないところばかりを見てしまうところだな、と気

づきました。「告知しない」方針に則ることによって、結果的に「Zさんらしさ」を支える支援ができていたのだな、と素直に思えるようになりました。ありがとうございました。

高橋 よかったですね。本当ならここできれいに終わりたいところですが、あと5分つき合ってください（笑）。

担当を交代したことについて

高橋 Aさんのひっかかっているもう一つの課題、Fさんと交代した点について最後に考えてみましょう。ここまでのやりとりもふまえて、いま振り返ってみたときAさん自身はどう考えますか？

Aさん 先ほどから三男から届いた最後のメールを読み返していたのですが、三男は決してFさんを外してほしかったわけではなかったのだと思いました。「何の仕事だって初めから全部を引き受けることはできないのです。だからそこには成長がなくてはなりません」。これは成長を促す立場である管理者としての私に対する戒めの言葉だと思います。たしかに今のFさんにとっては難しいケースだったかもしれませんが、私が前に出るのではなく、Fさん自身の成長のためにも担当を外してはいけなかったな、と思いました。

高橋 そうですね。三男が事業所に来て怒りを爆発させたときも、彼は決して担当の交代を望んでいたわけではないのですよね。仮に主担当を交代するにしても、Fさんの今後の成長を考えたときには、Aさんと一緒に動くなどして、このケースの支援のプロセスに立ち会えるようにしてあげるとよかったですよね。

Aさん そのとおりだと思います。これからは、管理者・主任ケアマネジャーである立場をもっと強く意識して、スタッフの成長にも配慮しながらケースにかかわっていきたいと思います。みなさん、今日は本当にありがとうございました。